

Contents *****

特集：2016年選挙とドナルド・トランプ現象	1p
<今週の The Economist 誌から>	
”Trump’s America” 「トランプの米国」	8p
<From the Editor> 9月利上げはあるのか？	9p

特集：2016年選挙とドナルド・トランプ現象

レイバーデイ（9月の第1月曜日＝今年は7日）を過ぎたら、米国政治の夏季休暇は終了。連邦議会は動き出すし、米大統領選挙の候補者選びも本格スタートとなります。9月16日には、共和党の第2回候補者討論会がレーガン記念図書館で行われる。いよいよ2016年選挙の季節が始まろうとしています。

序盤戦最大の注目点は、不動産王ドナルド・トランプ氏が共和党候補者選びでフロントランナーとなっていること。多くの人が嫌悪感を表明していて、それは今週号の The Economist 誌カバーストーリーも例外ではありません。しかるにこの現象、そんなに悪いことばかりでもないと筆者は考えております。

●2016年選挙の歴史的な位置づけ

来年は4で割り切れるうるう年。夏季五輪大会が開催され、米大統領選挙が行われる年となる。そろそろこの問題を取り上げるのに適した時期が近づいている。最初に、これまでの米大統領選挙の歴史を軽く振り返ってみよう。

次ページにある通り、1980年以來の米大統領選挙は共和党の5勝、民主党の4勝とほぼイーブンである。最近は「新人が現職を打ち破る」ことがめずらしくなり、1992年以降は4代の大統領が揃って2期8年の任期を全うしている。ゆえに大統領選挙は、「現職対新人」（現職が勝利）→「新人対新人」（野党側新人が勝利）」というパターンが続いている。

仮に次回の選挙で共和党が勝つとしたら、「野党側新人の勝利」となってこのパターンが継続することになる。逆に民主党が勝つとしたら、1980年代に共和党が果たして以来の同一政党3連勝ということになる。

第2次世界大戦以降の歴史で、同一政党が3連勝したことはこの1988年の1回だけである。その1980年代は「保守主義の時代」と呼ばれた。ルーズベルト大統領が築き上げたリベラル派の天下を、レーガン大統領の時代にひっくり返したというわけである。それから30年、仮に次の選挙で民主党候補（例えばヒラリー・クリントン）が勝てば、もう1回振り子が触れて、リベラルの時代が到来した、という評価になるだろう。

他方、共和党の候補が勝った場合は、今までのサイクルが続くことになり、「やっぱり米国は中道右派の国」ということになりそうだ。少し大袈裟な言い方になるが、2016年選挙で問われるのは、「時代はどっちに向かっているのか」である。

○米大統領選挙の近現代史

	DEM Democrats	GOP Republican	勝敗の行方
1980	Jimmy Carter (39) Gov.(GA)	Ronald Reagan (40) Gov.(CA)	現職対新人 新人の勝ち→GOP
1984	Walter Mondale Ex.VP	Ronald Reagan (40) Gov.(CA)	現職対新人 現職の勝ち→GOP
1988	Michael Dukakis Gov.(MA)	George H. W. Bush (41) VP	新人対新人 与党側新人の勝ち→GOP
1992	Bill Clinton (42) Gov.(AR)	George H. W. Bush VP	現職対新人 新人の勝ち→DEM
1996	Bill Clinton (42) Gov.(AR)	Bob Dole Sen.(KS)	現職対新人 現職の勝ち→DEM
2000	Al Gore VP	George W. Bush (43) Gov.(TX)	新人対新人 野党側新人の勝ち→GOP
2004	John Kerry Sen.(MA)	George W. Bush (43) Gov.(TX)	現職対新人 現職の勝ち→GOP
2008	Barack Obama (44) Sen.(IL)	John McCain Sen.(AZ)	新人対新人 野党側新人の勝ち→DEM
2012	Barack Obama (44) Sen.(IL)	Mitt Romney Gov.(MA)	現職対新人 現職の勝ち→DEM
2016	?? <リベラルの時代?>	?? <やっぱり中道右派?>	新人対新人 与党側新人 or 野党側新人

また、過去9回の選挙を振り返ってみると、「新人対新人」の年は常に激戦となっている。2008年選挙は「オバマ対ヒラリー対マッケイン」の三つ巴の大熱戦だったし、2000年選挙は「フロリダ再集計」の騒動を招くほど僅差の戦いであった。2016年も、かなり面白いレースとなることを期待していいのではないだろうか。

●2016年選挙の日程は先祖がえり

次に来年の選挙カレンダーを確認しておこう。

近年の米大統領選挙では、「予備選日程の前倒し傾向」が続いてきた。2012年選挙などは、最初のアイオワ州党员集会が1月3日に行われたほどである。これは各州が、「わが州の有権者の意向を大統領選に反映させたい」と考えるからだ。皆がそうしてしまうと予備選が短期集中決戦となってしまう。

2016年選挙は以下の通りとなっている。オーソドックスなスタイルに戻って、「序盤戦4州は2月に実施」「3月は南部を中心に開票」「大票田であるニューヨーク州は4月、カリフォルニア州は6月」という、昔に戻ったようなゆとりある日程となっている。「候補者が全米を回りながら、政策論争を煮詰めていく」という本来の姿に立ち返ったようだ。もっとも共和党にとっては、候補者が多過ぎてすんなり決まらず、2012年のような「恐怖の長期消耗戦」に陥るリスクもあると言えよう。

○米大統領選挙関連日程

1月16日	台湾総統選挙
2月1日	アイオワ党员集会
2月9日	ニューハンプシャー州予備選挙
2月20日	共和党・サウスカロライナ州予備選挙/民主党・ネバダ州党员集会
2月23日	共和党・ネバダ州党员集会
2月27日	民主党・サウスカロライナ州予備選挙
3月1日	テキサス州など13州で予備選挙、党员集会 (Super Tuesday)
3月15日	フロリダ、オハイオなど5州で予備選挙 (Crucial Tuesday)
4月19日	ニューヨーク州予備選挙
6月7日	カリフォルニア州など5州で予備選挙・党员集会
7月下旬	参議院議員選挙 (日本)
7月18-21日	共和党大会 (クリーブランド、オハイオ州)
7月25-28日	民主党大会 (フィラデルフィア、ペンシルバニア州)
8月5-21日	リオデジャネイロ五輪
10月	テレビ討論会 (3回)
11月8日	大統領選挙投票日
2017年1月20日	新政権発足 (第45代合衆国大統領が誕生)

もうひとつ、近年の選挙では「党大会日程の後ろ倒し傾向」も目立っていた。2008年選挙では、両党の党大会がいずれも9月に行われたほどである。あのときは、民主・共和両党の正副大統領コンビが正式決定した直後にリーマンショックが起きた。本選挙までの日程が窮屈な中で、金融危機対策が行われたことをご記憶の方は少なくないだろう。

その点、2016年選挙の党大会はいずれも7月中に実施される。これまた昔のスタイルで、8月のリオ五輪期間中は選挙戦がお休みとなりそうである。なお、共和党はオハイオ州、民主党はペンシルバニア州という重要激戦州を選んでいるのは「定跡通り」である。

●民主党は本命クリントン候補に死角

次に民主党内の候補者選びの現状を見てみよう。

ヒラリー・クリントン前国務長官の支持率は、一時は6割を大きく上回っていたけれども、党内左派のサンダース上院議員に猛追を受けており、現在では4割台に低下している。知名度や選挙資金面など条件面では他を引き離しているが、党内を固めきれていない。

より現実味のある候補者として、バイデン副大統領の出馬を促す動きも出てきた。2期8年を務めた副大統領は、普通なら次期大統領を目指すものであり、例外はブッシュ政権時のディック・チェイニー副大統領くらいのもの。ゆえに異とするには当たらないが、さすがに年齢的に辛いのではないか。今から準備を始めて、資金や組織が間に合うのかどうかも疑問符がつく。ただしご本人は、この成り行きをエンジョイしているようだ。

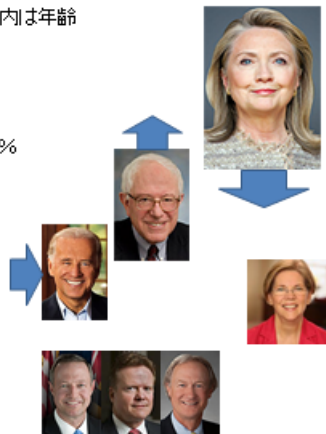
そうでなくとも民主党は、何かの理由でクリントン候補が出られなくなったときの備えが手薄である。おそらくその場合は、党内で人気の高いエリザベス・ウォレン上院議員が急ぎよ登板するだろうが、「控え候補者」の層はいかにも薄いように見える。若い候補者が少ない点も懸念材料だ。オマリー元知事などは低支持率に甘んじており、よくて副大統領狙いに留まりそうである。

2016年大統領選挙・民主党編

下線は既に出走表明済み、○内は出身州、◇内は年齢
<http://www.realclearpolitics.com/elections/2016/>

クリントン前国務長官がリード
<RCP Ave. 8/20-9/8>

- Fr. Sec. States Hillary Clinton (NY) <67> 45.8%
- Sen. Bernie Sanders (VT) <73> 22.6%
- V.P. Joe Biden (DE) <72> 20.0%
- Sen. Elizabeth Warren (MA) <66> ---%
- Fr. Gov. Martin O'Malley (MD) <52> 2.2%
- Fr. Sen. Jim Webb (VA) <69> 1.8%
- Fr. Gov. Lincoln Chaffee (RI) <62> 0.6%



考えてみれば次期大統領を目指すうえで、クリントン候補以上の経歴はこの世に存在しない。なにしろファーストレディ 8 年 (93~00 年)、NY 州選出上院議員 8 年 (01~08 年)、国務長官 4 年 (09~12 年) である。「女性初の大統領」に向けて、これだけ準備を積み上げられてしまうと、ほかの人はおいそれとは手を挙げられなくなってしまう。

ただし大統領を決めるのは経歴ではなくて選挙である。選挙には偶然性がつきものであって、「安全で確実な勝ち方」というものは存在しない。2008 年の民主党予備選も、いくつもの偶然が重なって、最後はオバマが勝利を手にしたのではなかったか。

2008年の選挙戦でもたびたび見られたことだが、ヒラリーの弱点はダメージコントロールを苦手とすることだ。今回の Emailgate（電子メール事件）への対応においても、途中までは強気な態度を通して、一転して謝罪戦術に出るなど、あいかわらず不測の事態に対する対応が上手くない。こうして考えてみると、条件的にはまったく申し分ないのだが、クリントン候補は「堂々の本命馬だが、やや死角あり」と言えるだろう。

● 共和党はドナルド・トランプ旋風

共和党側は 17 人もの候補者 が出てしまった。これだけ大勢いると、一堂に会するだけでも一苦勞である。8月6日に行われた FOX News 主催の第1回候補者討論会は、世論調査支持率上位の候補者 10 人だけで実施し、選に漏れた 7 人は別の時間帯に討論会を行うという「苦肉の2部構成策」を取っている。



問題は、不動産王のドナルド・トランプ氏がダントツで他をリードしていることだ。自他ともに認める大富豪だが、結婚は3回、破産は4回というお騒がせキャラである。最近ではビジネスよりも、テレビのリアリティ番組『アプレンティス』の司会者として知られている。政治家としては、良く言えばアウトサイダー、悪く言えば「色物」で、当初は「すぐに姿を消すだろう」と見られていた。案の定、暴言や失言の山を築いて輿感を買っているのだが、不思議なことに世論調査では一番人気を続けている。

なにしろ「メキシコ移民はドラッグや犯罪を持ち込んでくる。レイプ犯もだ」みたいなことを言う。女性蔑視発言も多い。そうでなくても共和党は「いまだに白人男性中心の政党」で、今後の人口動態を考えれば不利は否めない。中間選挙は投票率が低いかから勝てるけれども、大統領選挙になったら投票率は必ず上がる。ゆえに2016年選挙では、既に人口で黒人を抜いた ヒスパニック層への支持拡大を目指すべきところ、候補者が不法移民排斥を申し立てるようでは、党として困るのである。

とはいえ、トランプ氏が正式に共和党の大統領候補者となる見込みはかなり薄いと考えるべきだろう。

1. 候補者選びの序盤戦で、「アウトサイダー候補」が人気となるのは珍しいことではない。（ベン・カーソン医師、元経営者のカーリー・フィオリーナ氏も人気上昇中）。ただし彼らが勝ち切れるかという点、そんなに甘くはない。2004年の民主党予備選挙では、歯切れのいいハワード・ディーン元バーモント州知事が一番人気となり、打倒ブッシュを目指して威勢が良かったが、緒戦のアイオワ州黨員集会で3位に終わって急に失速した。予備選が近づくと、有権者は Electability (当選可能性) を意識するようになる。トランプ氏の人気も、「今のうちが華」と考えるべきであろう。
2. トランプ氏への支持は今のところ3割程度である。4年前の共和党候補者選びにおいても、ミット・ロムニー候補が「支持率4割までは行くが”Landslide”で勝てない」という決め手の弱さを露呈したものだ。トランプ氏は確かに人気があるが、黨員に対して過半数以上の支持をまとめられるかといえは疑問である。
3. 米国政治が「ショー化」していることも、トランプ人気の一因となっている。第1回の候補者討論会は、膨大な観客を集めたロック・コンサートのようなノリであったが、あれではアドリブ上手なテレビ司会者がいちばん目立ってしまう。しかし少人数の真面目な政策論議となれば、トランプ氏に勝ち目は薄いだろう。
4. 「トランプ氏が第三政党から出るのではないか」との観測も絶えない。その場合、1992年の「ロス・ペロー旋風」の再現となり、第三政党に白人保守層の票を奪われた共和党は惨敗する確率が高まることになる。ただしトランプ氏がそこまで政治に深入りするとは考えにくい。本物の大富豪が、そんなことに身銭を切るだろうか…？

●2016年選挙のテーマを求めて

ともあれ、「またもクリントン家とブッシュ家の戦いか？」などと言われていた2016年選挙の序盤戦を盛り上げてくれたことは、トランプ旋風の功績と言えよう。それ以上に、今の米国における「怒れる有権者」の気分を掘り当てた意義は大きい。

景気指標から言えば、「米国経済は好調だ」ということになっている。だが、普通の国民が好況に沸いているかといえは、けっしてそんなことはあるまい。企業業績が好調であっても、失業率が5.1%まで下がっていても、景気信頼度は低く、ワシントン政治に対する信認は地を這うような水準である¹。だからこそ、「この国は日に日に偉大でなくなりつつある」「中国の指導者は、われわれの指導者よりも賢い」といったトランプ氏のメッセージがリアルに響くのであろう。

¹ ギャラップ社の Economic Confidence Index は、今年初めに金融危機以降で初めてプラスに転じたが、直近の9月データではまた▲14に低下している。

もうひとつ、「政治家の言葉」に対する信頼が極端に低下していることも明らかになったと言えよう。普通の政治家が問題発言をすれば、非難を受けて支持率は下落する。しかし政治家ではない——暴言が売りのテレビタレントとされている——候補者が口にすれば、いくらマスコミが叩いてもほとんど効果がないのである。

ことによると米国政治には、オバマ大統領という見た目がカッコよく、言葉が巧みで、けっして失言しない大統領の時代が6年半も続いたことによる反動が生じているのかもしれない。プロ政治家の美辞麗句に信用がおけなくなり、有名人のぶっちゃけ本音トークに人気が出ているようなのである。わが国における一時期の橋下徹大阪市長人気にちょっと似ている。

2016年選挙の序盤戦の焦点は、このトランプ現象をうまく解析し、有権者に対して「解決策」を提示することであろう。それはプロ政治家の仕事でなければならない。共和党の候補者選びにおいては、アウトサイダー候補の優勢が当面は続くだろうが、2016年に入って予備選挙の日程が近づくと、「勝ち目のある候補者」に目が向くようになる。雰囲気は一変するはずである。

つまるところ、トランプ氏が第45代合衆国大統領に就任している未来は想像しがたいので、共和党の候補者選びはエスタブリッシュメント候補の誰かに落ち着くことになるのではないかと。仮に馬券を買うのであれば、筆者ならば以下の4候補から選びたい。ちなみに<>内のオッズは、選挙サイト”2016 Election”による²。

○共和党内の有力候補

- **ジェブ・ブッシュ元知事**（フロリダ州） <4/1>
 - 知名度や資金量で他を圧倒し、スタッフも充実。「ブッシュ」という名前が重荷。党内の好感度をいかに上げるかも課題。
- **マルコ・ルビオ上院議員**（フロリダ州） <5/1>
 - キューバ系でアメリカンドリームの実験者。クリントン相手の戦いは、若さが武器になる。政策面では一層の研鑽を要す。
- **スコット・ウォーカー知事**（ウィスコンシン州） <7/1>
 - 民主党州で奮闘している保守的な知事。労組との戦いぶりで名を上げた。弱点は「大学を卒業していないこと」。
- **ジョン・ケイシック知事**（オハイオ州） <30/1>
 - オハイオ州で2度当選の実績あり。政策的には穏健。クリーブランドで行われた討論会では「地元の利」を得ながら、いまひとつ目立たなかった。

² <http://www.2016election.com/2016-republican-nomination-odds/> ちなみにドナルド・トランプ氏のオッズは10/1となっている。

<今週の The Economist 誌から>

”Trump’s America”

「トランプの米国」

Cover story

September 5th 2015

*とうとう The Economist 誌の表紙になってしまいました。ドナルド・トランプ氏の「ズラ？」がホワイトハウスに被せられるというあり得ない絵柄。大丈夫か？

<抄訳>

「この国は今じゃ世界の笑いものだ」とドナルド・トランプは言う。でも恐れることはない。「俺様は実はとても賢い。選挙を戦いつつ、金儲けもする初の大統領候補になる」

出馬宣言の頃はジョークだと思われていた。リアル番組の司会者で公職経験のない者が最高司令官になり、核兵器のボタンを持つのだろうか。だがここ数週間、彼は普通の候補者なら自滅しそうな数々の失言にもかかわらず、共和党候補者の先頭を走っている。

トランプ氏は一貫性のなさを恥じない。中絶に賛成と言ったり反対と言ったりする。銃規制についても同様。以前は国民皆保険を望むと言っていたが、最近はおバマケアを止めて「もっとスゴいやつ」を作ると言っている。2000年には改革党の候補者をめざし、10年前には「自分はむしろ民主党」と言っていた。今や彼は共和党候補者である。

本誌は取材に際し、「なぜ共和党有権者はあなたの発言に騒がないのか」と尋ねた。すると彼は信仰の問題と解したらしく、教会にも滅多に行かないのに「俺は神を信じている」とのたもうた。すぐに話題を転じ、「資産は100億ドルを超える」と語りだした。

国内政策では大胆でおぞましい提案を行っている。メキシコ国境に壁を築き、その費用はメキシコに払わせる。1100万人と目される不法移民を国外追放する。2850億ドルの負担が生じるのだが。米国生まれの米国市民であっても容赦しない（それって違法だが）。

外交政策も乱暴だ。イスラム国を破り石油を確保するために米軍を派遣する。軍事的にも経済的にも「米国を再び偉大に」する。今のアホどもに代わる優れた交渉者になるという。地政学は不動産取引とは違うのだが。彼の世界観は独特である。あらゆる国が米国を食い物にしている。中国は史上最悪のコン泥であって、人民元操作には輸入関税を課す。韓国や日本との同盟関係も見直す。「だって日本は何度も中国に勝っているだろ？」と。

トランプ氏は①自己宣伝の天才で、②政治家だと思われていないという強みがある。「あの太った豚」みたいなことを言う無礼さが、かえって誠実な指導者に映る。エリートに裏切られ、社会変化に取り残されたと思っている全米数千万人の怒りを代弁しているのだ。

米国にポピュリストの伝統ありとはいえ、主要政党の候補者となるのは1908年以来だ。1996年には、パット・ブキャナンが序盤州でボブ・ドールを相手に奮戦したこともある。

トランプ氏はそれよりも危険な存在だ。①億万長者ゆえ金欠で撤退することはない。②対立候補が多過ぎて少ない票で指名を取れそうだ。共和党はやがては主流派候補で団結するだろうが、デマゴグが選挙に勝っても不思議はない。共和党支持者は気をつけられよ。

<From the Editor> 9月利上げはあるのか？

米大統領選挙もさることながら、来週 16～17 日には注目の FOMC が控えています。果たして 9 月会合における利上げはあるのでしょうか。

ここでご紹介するのが、テレビ東京系列『ニュース・モーニング・サテライト』（月～金曜、5：45～6：40AM）で行っている「モーサテ・サーベイ」のデータです³。同番組に出演しているコメンテーター約 30 人は、内外の経済をどう見ているか。毎週末にインターネットでアンケートを行っているものです。

○設問「アメリカの利上げ開始時期は？」

調査日時	9 月	10 月	12 月	来年 1 月	来年 3 月	それ以外
8 月 7～9 日	74.19%	12.90%	12.90%	—	—	—
8 月 14～16 日	72.00%	12.00%	16.00%	—	—	—
8 月 21～23 日	56.67%	6.67%	36.67%	—	—	—
8 月 28～30 日	29.63%	22.22%	37.04%	3.70%	7.41%	0.00%
9 月 4～6 日	22.22%	37.04%	33.33%	3.70%	3.70%	0.00%

上記の通り、お盆の頃までは「7割が9月説」でした。それが中国発の「8/24 ショック」で雰囲気は激変。今週発表された分では、とうとう 2 割になってしまいました。いちばん多いのが 10 月説で、Fed ウォッチャーの鈴木敏行さんは、「9 月に予告して、10 月に実施すればサプライズにならない」という解説をされています。

ちなみに筆者は「来年 1 月説」に票を投じております。3.7%ということは、たぶん一人だけなんでしょうね。前号でも書いた通り、「利上げはそう簡単なことではないし、なるべく急がない方が良い」と考えております。

もっともそこは米国のことですから、「他所の国のことなど知ったことか。ウチの金融政策は、国内の指標だけを見て決める」（キッパシ！）と言われてしまうかもしれません。まあ、それも有り得る話であって、1994 年の米利上げの際はメキシコで資金逃避が発生して、「テキーラショック」と呼ばれる金融危機が起きている。お陰で当時のルービン財務長官は苦勞するのですが、よくも悪くも「空気を読まない」のが米金融政策の伝統です。利上げがあっても驚いてはいけません。もちろん新興国は戦々恐々と見ているし、中国も気が気ではないでしょう。

³ <http://www.tv-tokyo.co.jp/mv/nms/survey/>

ところで習近平国家主席は、今月下旬に「国賓待遇で」訪米し、9月25日には米中首脳会談が予定されている。その前の9月16日には、第2回目の共和党候補者による討論会がレーガン大統領記念図書館で行われます（今度はCNNが主催です）。ここでたぶん、「中国叩き」発言がたくさん飛び出すのではないのでしょうか。

なにしろドナルド・トランプ氏は、「習近平国家主席に公式晩餐会は必要ない。私ならマクドナルドのビッグマックでもてなす」などと放言しています。今度はどんな面白いことを言ってくれるのか。来週の米国情勢はまことに盛りだくさんです。

* 次号は2015年9月25日（金）にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com